バカと能力と召喚獣

やまたい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと能力と召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ１２７０Ｓ

【作者名】
やまたい

【あらすじ】
バカテスを元ネタとした、ギャグになるであろう小説。
禁書原作のつもりが、土台がバカテスになってた。
シリアスシーンがあるかはわからん。
きっとまだ原作は増えるなｗｗ
原作崩壊注意。

#0　プロローグ

目が覚めると、俺はどこかに倒れていた。

・・・ここは・・・どこなんだ・・・？

・・・雨が降っている。

要するに、俺は雨に打たれているようだ。

ただ、感覚が麻痺していて、何も感じない。

だめだ、もう意識がもたない・・

そしてまた、俺の意識は闇に落ちて行った。

そして、また、数時間後。

今度は、どこかのベッドに寝ていた。

目の前には、一人の少女。

・・・・・・・・・・・え。

ちょっとまて。いま俺はどんな状況なんだ？

だれか詳細を頼む。

ほんとに・・・

これは何なんだーーーーーーーーーーーっ！

#0　プロローグ（後書き）

えーと・・・
はじめまして、やまたいです。
もっとマシな名前がなかったのかと突っ込まれそうですが・・・
その通りです。
更新は…かなり遅いでしょうねｗｗ
では、また。

#1　そんで結局何なのさ？

まず、今まで何があったのか整理しよう。
＜以下回想＞
３月某日。
俺はとあるお店に向かっていた。チャリで。
なぜかと言うと、ベイブレードをやりに行くためだ。
もう中学生なので、大会には参加できないが、ベイ太（疑似ベイバトルシュミレーション装置。勝つとベイポイントがもらえる。）なら年齢制限はない。
そして、ベイポイントをためると、限定ベイがもらえるのだ。
ちなみに俺は、ベイに没頭すると、何時間もやっている危険人物である。（母親談）
この日も俺は、マーキュリーアヌビウス目当て（６００００ポイントで交換）に、ベイ太に向かっていた。
猛スピードで。（ちなみに、俺はサイクリングに出かけても、何時間も帰ってこない。母親いわく、糸の切れた凧らしい。）
そして、いつもの車通りが少ない交差点に差し掛かる。
いつも猛スピードでスルーしているため、いつも道理通り抜けようとした。猛スピードで。
いつもなら「反省はしていない」となるのだが、今回は違った。
横から結構なスピードでシロネコヤマト宅急便のトラックが走ってきた。（ちなみにこの時俺は信号無視をしていた。）
この後は予想がつくだろう。
そのままドーーーーーーーン！　である。
あれ？これって俺が悪いじゃん？
＜回想終わり＞
心残りは、マーキュリーアヌビウスが手に入らなかったことである。
あと、彼女がいなかったこｔ（ｒｙ

で、この（現在の）現実に目を向ける。
俺はベッドで寝ている。
容姿は鏡がないのでわからない。
で、横には一人の少女。
髪は茶髪で短髪。
整った顔立ちに発展途上ｎ（ｒｙ
あれ、どっかで見たぞこの人。

少女「ねぇ、大丈夫？」

あぁ、えーと、確か…

「お兄ちゃん」

・・・は？
お兄ちゃん？
ｏｎｉｉｔｙａｎｎ？
ｂｒｏｔｈｅｒ？
「えーと・・・・」
「もう、忘れたの？　・・・じゃ、一発…」
ちょっと待て、この人は何をしている？
なんだか辞書を高く振りかざそうとしているんだが…
俺「まて、それは叩くものじゃないよね？とりあえず説明書（注：ありません。）をよんでから・・・っ！！」

「うぉらぁーーーーーっっ！！」
「ぎゃーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！」

そこで俺の記憶は途絶えている。

続く。

#1　そんで結局何なのさ？（後書き）

どうも。久しぶり？の投稿です。
ベイブレードの説明が大変長くなったｗｗ
なかなかパソコンを使えません。
原因：ＤＳのやりすぎ。
ちなみに筆者は、現実でもベイブレード＆サイクリング中毒です。
そして実際に事故りました。
しかもここまでの人生１３年に二回も。
まじで。
それでは、また今度会いましょう。

#2　現状確認の時間です。

少女「で、本当に私の事覚えてないの？」
俺「はい。」
俺とその少女は向かい合って正座している。
少女「それではもう一度殴りましょう」
俺「ちょ、ちょっとまt…」
少女「ここに釘バットがありまーす」
俺「殺す気だな！？お前殺す気だな！？」
少女「え？殴れば記憶も戻るでしょ？」
俺「そーじゃなくて！口頭で説明しろ！」

少女「へーい」
俺「最初から分かれ！そして悲しそうな顔しない！」
少女「はーい……」
ー中略ー
俺「なるほど。要するに、俺はお前ーー御坂美琴の幼なじみ、と。」
美琴「そう。」
俺「で、俺は交通事故で車にすっ飛ばされた。」
美琴「そう。」
俺「なるほど、だいたい分かった。」
美琴「そう。じゃあ、記憶を完全に戻すためにもう一度・・・」
俺「待て！！死ぬ！今度は本当に死ぎゃあああああ！！」

俺「本当に死ぬかと思った・・・」
美琴「そんな痛かった？」
俺「痛いよ！！」
美琴「そう？ごめん…」
俺「まあ、いいけど・・・一つ、聞きたい事がある。」
美琴「何？」
俺「俺・・・ベイブレード持ってる？」

つづくっ！

#2　現状確認の時間です。（後書き）

どうも、やまたいです。
前回また今度とかいっといて同日投稿です。
もしかしてもう一話くらい投稿するかも
ではでは。

#3　ベイブレードはあるようです。

今、俺はベイスタジアムにいる。
いる、という表現は変に聞こえるかもしれないが、いるものはいるのだ。
目の前にはアニメ並みにでかいベイスタジアム。
そして、ベイランチャーを構えている少年。
ちなみに、俺も同じポーズである。
これが何を意味するかと言うと……
「「「3！」」」
「「「2！」」」
「「「1！」」」
ベイバトルである。
「「ゴー…シュート！」」
観客の掛け声と共に、ベイをシュートする。
俺のベイはバサルトケルベクスGB145SF、アタックタイプ。
対する相手のベイは、フレイムサジタリオC145S、スタミナタイプ。
要するに…
「行け！サジタリオ！」
弓矢ケンタである。
もちろん客席には銀河たちもいる。あと美琴も。
以下、ケンタ：ケ、　美琴：美、　銀河：銀。
銀「頑張れー！ケンタ！」
美「負けたら承知しないわよ！！（ビリビリッ）」
ちょっと待て。今ビリビリって音がしたんだが。
まあ、今はバトルに集中しよう。
相手はスタミナタイプ。持久戦には持ちこめない。
だが、こいつの攻撃力を持ってすれば、一気にケリを付ける事も可

能だ！
俺「いけ！ケルベクス！！」
サジタリオに向かって、一直線に走らせ、攻撃を仕掛ける。
ケ「向かい撃て！！」
ほう…なかなか勇気あるじゃないか。
俺「なら遠慮なく！」
ケルベクスが一気に加速する。
ガキン！
互いのベイがぶつかり合う。
持久型のサジタリオは攻撃に耐え切れず、数メートル後ろに弾き飛ばされる。
だが、スタジアムアウトまでは行かず、しっかりと回っている。
俺「なかなかやるじゃないか！」
ケ「そっちこそ！」
なかなかいい手応えだ
だが、こんなことで諦めるようなケルベクスではない。
何度も何度も攻撃を仕掛ける。
だが、決定的なダメージが与えられない。
なら・・・！
俺「必殺転技！ケルベクス！スカイ・シューティング・アタック！！」
ケ「なっ！？」
俺「いけぇっ！」
掛け声と同時に、ケルベクスが空高く飛び上がる。
だが、我ながら妙なネーミングセンスだ。
俺「おらあああああああっ！！」
サジタリオ目掛けて、一気にケルベクスが急降下する。
そして、サジタリオのクリアウィールにケルベクスの攻撃がヒットする。
ケルベクスが攻撃を止める頃には、サジタリオはだいぶ弱っていた。

だが。
ケ「サジタリオ！フレイムクロウ！」
俺「なっ…！？」
まだそんなパワーが残っていたとは…！
ケ「今度はこっちの番だ！！」
ガキン！
今度はサジタリオの攻撃がケルベクスにヒットする。
俺「くっ…！」
「」
「」なんか客席で美琴がボソボソとなんか言ってる。なんかコワイ。
…とにかく！
まだケルベクスの体力はある。
対してサジタリオは、先の攻撃の反動でよろけている。
…今だ！！
俺「行けっ！！」
ケ「あっ！！」
弱っているサジタリオに、全速力でケルベクスが突っ込む。
そしてーーーーー
キンッ！！
サジタリオが、吹っ飛んだ。
そして、スタジアムの外で、カラカラと金属音を立てて、転がっていた。

パシッ！
ケルベクスが俺の手元にとんできて、それを俺がキャッチする。
そして、客席から歓声があがる。
ＷＩＮＮＥＲーー神山大樹ｗｉｔｈバサルトケルベクス！！
俺「よっしゃぁぁ！！」
美「やったぁ！！」
ケ「そんな…」

ケ「ありがとう、いい勝負だったよ。」
俺「こちらこそ！」
互いに握手を交わす。銀「すげえ！お前すげぇよ！今度俺ともバトルしようぜ！！」
俺「ああ！」
この日、友達が増えた。

ところで。
なんで俺が大会にいるかと言うと。
＞以下回想＜
俺「俺って、ベイブレード持ってたっけ？」
美「そりゃ持ってるでしょ。誰でも持ってるわよ？」
俺「よっし！！！これで生きていける！」
美「何なら、大会でも行ってきたら？」
俺「大会？」
美「そ。誰で参加できるわｙ・・・って、ちょっと！？今日じゃないわよ！？」
俺「ちょっと出かけてくる！」
ついでに、ベイ太もあるし、前世のポイントも受け継がれているようだ。
それに、ニコ動やツイッターもあるし、アカウントやデータも受け継がれている。
これで俺は生きていける・・・っ！！

てことで・・・
つづくっ！

#3　ベイブレードはあるようです。（後書き）

どうも。
結局1日で3話も投稿してしまったｗｗ

ところで。
ＤＳからも投稿できるんだね。便利だ。これでパソコンできなくても投稿できる！！
それでは、また次の投稿まで気長に待っていただければ幸いです。
ではでは。

#5　なんか・・・ごちゃごちゃと。

ひとまずここまでの事を整理しよう。
一つ！　神山大樹は一度死んで学園都市に転生した！
２つ！　この世界には大樹が所有していた物が全て受け継がれていた！
そして三つ！　ベイバトルを通じてできた新しい仲間！
ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌ！　今大樹が使えるメダｒ（ｙ
○面ライダー○ーズみたいになってるのと、
んな事聞いてねえぞ！　な所があるのは気にしないでね☆
言い忘れていたが、ここは学園都市である。

よってーーーー

ドォォォォォォォン！！！

プールの方でものすごい音とともに水柱が上がる。

どうやら美琴の身体検査（システムスキャン）が終わったようだ。『・・・総合評価、レベル５。』

まあ、そりゃそうだ。

美琴だし。

ここは学園都市なので、当然身体計測（システムスキャン）がある。

『これは？』

『波・・・星・・・』

『次、６５度。』

『はい。』

そこいらでそんな声が聞こえる。

そこまでなら、普通だ。そこまでは。

だがーーー

『試獣召喚？サモン？！』

そう。試験召喚獣がいるのだ。

体育館に実習用の召喚フィールドが張られており、総合科目勝負でランダムに選ばれた相手と戦うと言うものだった。

そう、ここは文月学園。
そしてーーーー

鉄人「神山。お前はかなりの優等生だと思っていた。実際成績優秀だしな。」

そうだったのか。

鉄人「だが、今回のテストで俺の考えが間違っていることに気づいた。」

俺「そうですか？」

「神山ーーーーーー」

【神山大樹　Fクラス】

鉄人「どうしてこうなった」
いや、ついうっかり寝ちゃった☆

明久「やあ、神山君！」
俺「おう！」
実は数日前、偶然出くわして話しかけた所、話があって、すっかり意気投合してしまった。

というわけで、明久とは友達である。
明久「ねえ、神山君はどのクラス？」
俺「えーと・・・」
とか言いながらAクラスを通りすぎる。
明久「あれ？Aクラスじゃないの？」
俺「うん。実は……」

明久「な、なんだってーーーーー！？」
明久の絶叫。学校中に響いただろコレ。
でもまあ、驚くだろうな。
自慢じゃないが俺はAクラス並の学力の持ち主だ。
明久「マジ！？マジで！？Aクラス並の大樹が！？」
俺「マジです。」

そんな、なんだってーな会話をしながら、Fクラスの前に到着する。

「「な、なんだこれ…」」

目の前にあったのは、

廃屋だった。

俺「流石にこれはひどい・・・」
明久「同感…」
俺「ま、まあ、入ろうじゃないかｗｗ」
明久「そ、そだねｗｗ」

…ガラッ

明久「遅れましたー☆」
雄二「早く座れ、このウジ虫。」
俺「落ちつこう、落ちつこう明久！」
明久「離して！僕はこいつをぶっ飛ばさないと気がすまないんだ！」
俺「ねぇ明久。僕の能力は発火能力（パイロキネシス）だったよね？」
明久「？…うん、そうだったね？」

各自の能力については後で話そう。人物紹介マダだし。

俺「…静かにしないと…火だるまにするよ？」
明久「またまた～、大樹は冗談が上手……」

…ボッ！（俺が手から火を出す音）

…ゴッ！　ジュゥゥゥゥ……（明久のすぐ真横に火を飛ばした音
＋そこにあった壁が焦げる音）

…

…

ニコォォォォオオォォォォオォォォォリｗｗｗｗｗ［俺の笑みを疑音
であらわした音（クラスメートの後日談）］
ビクッ！…ガタガタガタガタ（明久が震えながら振り返る）
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ［俺の迫力の疑音化（同じくク
ラスメート後日談）］

俺「黙ろっか？」

明久「了解しました、大佐。」

雄二「大樹…この壁はどうするんだ？」
雄二が指す先には、黒く焦げた壁。
明久「ねえ！僕より壁が心配なの!？」
雄二「ああ。」

壁　＜　明久の命。

明久「やっぱりぶっ飛ばさないｔ」
俺「はーい黙ろうねー（ボッ↑手のひらから火を出す音」
明久「ひっ…！」
雄二「で、壁は？」

俺「あ、ちょっと待ってー」

そう言って、俺は白ペンキを取り出し、焦げた所にペンキを塗っていく。

雄二「こんなんでごまかせると思っているお前って…」

俺「まあまあ、いいじゃんw」

ガラッ

福原「HRを始めます。座ってください。」

おっと。先生が来た。

福原「このクラスの担任を勤めます、福原です。」

福原「それでは、自己紹介をお願いします。」

俺「神山大樹だ。趣味はアニメやラノベを読む事だ。これからよろしく頼む。」

短かすぎないか。俺の自己紹介。

秀吉「木下秀吉じゃ。部活は演劇部、ーーーー」

ああ、やっぱり秀吉はかわいいなあ。

秀吉「ーというわけじゃ。一年間よろしく頼むぞい。」

最後にニコッと微笑む秀吉。よし…いつか秀吉の写真買うぞ！

明久「吉井明久です！気軽に『ダーリン』って呼んでくださいねっ

♪」

「「「「「ダァァーーリィーン！！」」」」」

おお。気持ち悪りぃ。

明久「…失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願い致します。」

…Fクラスって……

島田「島田美波です。海外育ちで、日本語は話せるけど読み書きは苦手です。趣味はーーー」

来るぞ。

島田「吉井明久を殴ることです☆」

明久「ひぃっ！」

土屋「…土屋康太。」

無口ね、ムッツリーニ。

…ガラッ

姫路「すみません、遅くなりました！」

福原「ちょうどよかったです、姫路さん。自己紹介をお願いします。」

姫路「はいっ。…姫路瑞希です、よろしくお願いします！」

F「あのー…」

そこで質問が入る。

F「なんでここにいるんですか？」聞きようによっては失礼かもし

れないが、この質問は最もだ。
なにせ彼女はAクラス並みの学力を持つのだから。
姫路「それは…その…途中で体調を崩してしまいまして…」
「なるほど…そういえば俺も熱（の問題）のせいで調子が悪くて…」
「ああ、科学か。あれは難しかったな。」

「昨晩弟がうるさくて…」
「黙れ一人っ子。」

「昨日彼女が寝かせてくれなくて…」
「須川会長、異端者です。異端審問会の準備を。」
「すみません嘘です」
姫路「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」
そして、逃げるように明久と雄二の間の席に着き、
姫路「き、緊張しましたぁ～・・・」
と机に突っ伏す。

そして。

明久「あのさ、姫…」
雄二「姫路」
早くも明久の人生計画『クラスメイトから結婚まで～君と出逢えた春～』は開始2分でエンドロールを迎えたようだ。とりあえずフォローしとこう。

俺「残念だったな明久。ここからは俺のターンだ。」
明久「えぇっそんな！！　ってかなんで分かるの！？」
俺「まあ…なんとなく分かるよ。」

そしてその横では、
姫路「は、はいっ。何ですか？えーっと…」
雄二「坂本。坂本雄二だ。よろしく頼む。」姫路「あ、姫路です。よろしくお願いします。」
深々と頭を下げる。
雄二「ところで姫路、体調は未だに悪いのか？」
明久「あ、それは僕も気になる。」
姫路「よ、吉井君っ！？」
明久「え、何でそんなに驚k」
雄二「姫路、明久がブサイクですまん」
明久「雄二！それ全然フォローになってないからね！？」
雄二「元からフォローする気など全くない」

…しょうがない。ここは俺がフォローを…

俺「残念だな明久。やっぱり俺のターンだ。」
明久「君もだよ大樹！」俺「まあまあ。」
明久「しかも君は話しかけようとすらしてないじゃん！」
俺「そうだな…じゃあ。　あ、姫路、俺は神山大樹だ。よろしく。」
姫路「あ、はい、よろしくお願いしますねっ（ニコッ」
明久「なっ…！僕の時よりもいい反応…っ！」
俺「冗談だ明久。ほれ、おまえのターンっと。」
明久「えっ？…ああ…ゴホンッ。　…それにしてもひどい教室だよね～。」「そうですね…せめてもう少しきれいな方が…」
「確かにな。さすがにこれはひどいだろ…」
「うん。さっきちゃぶだいが壊れたっていったら自分で修理してって言われたしね…」
「ああ。まずどうしたらこんなにボロくなるんだ…？」
「そうだね…あ、そうだ、雄二。ちょっと話があるんだ。ちょっといい？」

ああ、いいが…

そういって、明久と雄二は廊下に出ていった。

…ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ.

#5　なんか・・・ごちゃごちゃと。（後書き）

時間がめちゃくちゃ空いたヨーーーｗｗｗ
とい　うわけで、久しぶりの投稿です。
やっと文月学園にやって来たわけですが…いかがでしたでしょうか？

では、また次話で。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1270s/

バカと能力と召喚獣

2012年1月12日22時45分発行